

# FURIKA に関する Q&A

— 2019 年 6 月 —

福岡大学  
教育開発支援機構

- ◆ FURIKA の実施方法やフィードバックの活用方法については、『「授業アンケート FURIKA」 教員用マニュアル（実施方法とフィードバックの活用方法）』にて確認してください。
- ◆ 2019 年度新たに追加した質問には **NEW** マークを付けています。また、回答内容について、2018 年度から変更した箇所には下線を付けています。

## 目 次

第 1 章 授業アンケート FURIKA について .....	5
1. 目的・趣旨について .....	5
Q 1 授業アンケートの目的を教えてください。 .....	5
Q 2 授業アンケートを新しくするのはなぜですか。その背景を教えてください。 .....	5
Q 3 授業アンケートに FURIKA という名称がついているのはなぜですか。 .....	5
Q 4 これまでの授業アンケートとの主な違いは何ですか。 .....	6
Q 5 授業アンケートをWEB化したことで、回答率は下がりませんか。 .....	6
Q 6 「教員のパフォーマンス」や「学生のパフォーマンス」という用語が使われていますが、「パフォーマンス」とは何ですか。 .....	6
Q 7 「学生のパフォーマンス」を確認することに焦点を当てているのはなぜですか。 .....	6
Q 8 学生による主観的な評価を聞くことに、どのような意味がありますか。 .....	6
Q 9 三つのポリシーとの関係はどのようになっていますか。 .....	7
2. 設問項目について .....	7
Q 1 0 教員のパフォーマンス(板書の巧拙や声の聞きやすさなど)に関する設問は必要ないのですか。 .....	7
Q 1 1 出席状況に関する設問は必要ないのですか。 .....	7
Q 1 2 設問項目 3 (積極性に関する設問)への回答から何が分かるのですか。 .....	7
Q 1 3 設問項目 4 (理解度に関する設問) は必要ですか。 .....	8
Q 1 4 設問項目 5 は「自由記述」ではないのですか。 .....	8
Q 1 5 設問項目を新たに追加することはできますか。 .....	8
Q 1 6 FURIKA では、その授業の履修動機や、その授業への改善要望を聞く項目がありません。それらを 知りたいのですが、項目の追加はできないのでしょうか。 .....	8
3. データの活用について .....	8
Q 1 7 学生の匿名性は守られますか。 .....	8
Q 1 8 授業アンケートの結果は教員の評価に使われますか。 .....	9
Q 1 9 回答したデータは、どのように保管されますか。 .....	9
Q 2 0 回答したデータは、どのように分析されますか。 .....	9
Q 2 1 回答したデータは、誰にフィードバックされますか。 .....	9
Q 2 2 回答したデータは、どのような形式でフィードバックされますか。 .....	9
第 2 章 実施について .....	11
1. 実施に関すること .....	11
Q 2 3 授業中に、授業アンケートを実施する必要はあるのでしょうか（授業時間外に行うほうがよいのでは ないでしょうか）。 .....	11

Q 2 4	ゼミや実習でもアンケートを行う必要がありますか。 .....	11
Q 2 5	FU_Wi-Fi が整備されていない教室や屋外実習などでは、どのように実施すればよいですか。 .....	11
Q 2 6	オムニバス形式の授業の場合、どのように実施したらよいですか。 .....	12
Q 2 7	アンケートの回答期限を設けているのはなぜですか。 .....	12
Q 2 8	授業アンケートは、定期試験後に実施するほうが正確な回答が得られるのではないのでしょうか。 ...	12
Q 2 9	通常の授業と異なるスケジュールで実施する科目もありますが、授業アンケートの回答は、決められた回答期間（前期・後期 14～15 回目の授業期間）にしかできないのでしょうか。 .....	12
Q 3 0	授業の総括とは、具体的にどのようなことを行えばよいのですか。 .....	12
Q 3 1	FU_Wi-Fi へのつながり方がわかりません。 .....	13
Q 3 2	学生の回答状況は、スマートフォンでないと確認できないのですか。 .....	13
Q 3 3	回答状況・結果のページで回答済・回答率が 2 段で出るのはなぜですか。 .....	13
Q 3 4	学生の回答状況を確認しようとしたのですが、科目名が表示されません。なぜですか。 .....	14
Q 3 5	教員が学生の画面を見ることが出来れば、指導しやすいと思いますが、可能でしょうか。 .....	14
Q 3 6	実施する際に、特に気をつけることを教えてください。 .....	14
Q 3 7	授業アンケートの担当部署はどこですか。 .....	14
<b>2. 学生への対応について</b> .....		<b>14</b>
Q 3 8	スマートフォンを持っていない学生には、どのように指示をしたらよいですか。 .....	14
Q 3 9	本人以外（友人など）のスマートフォンから、アンケートの回答をすることはできますか。 .....	14
Q 4 0	FURIKA へのアクセスは、FU_Wi-Fi からの接続でないといけないのですか。 .....	15
Q 4 1	FUポータルにログインできない学生には、どのような指示をしたらよいですか。 .....	15
Q 4 2	FUポータルにログインできたのに、FURIKA にアクセスできない、という学生がいます。どうしたらよいのでしょうか。 .....	15
Q 4 3	似た名称の科目がある場合、学生が間違っただけで回答する恐れがあるのではないのでしょうか。 .....	15
Q 4 4	科目名を誤って選択し、回答をしてしまった学生がいます。どうしたらよいのでしょうか。 .....	15
Q 4 5	学生が回答をやり直すことは可能でしょうか。 .....	15
Q 4 6	「科目一覧」に履修している科目名が表示されないという学生がいます。どうしたらよいのでしょうか。 .....	16
Q 4 7	学生が回答の途中でログアウトした場合は、その回答はどうなるのでしょうか。 .....	16
Q 4 8	学生から F U R I K A に関する問い合わせがあった場合は、どうしたらよいのでしょうか。 .....	16
<b>第 3 章 設問 5（記述式設問）の公開について</b> .....		<b>17</b>
Q 4 9	設問 5 への回答のうち、どのような記述内容を公開すべきかについて指針はありますか。 .....	17
Q 5 0	設問 5 への回答に、「学んだこと」とは必ずしも言えないようなものが含まれています。しかし記述内容が優れており、受講生に公開したいのですが、可能でしょうか。 .....	17
Q 5 1	設問 5 への回答に、記述内容が似たものが複数ありました。この場合、一つだけを選んで公開すべきなのでしょうか。 .....	17
Q 5 2	設問項目 5 に対する回答を、受講生にフィードバックするのはなぜですか。 .....	17
Q 5 3	設問項目 5 は、他の学生の参考になるのであれば、広く閲覧できるようにした方がよいではないでしょうか。 .....	18
<b>第 4 章 担当教員へのフィードバック情報について</b> .....		<b>19</b>
<b>1. フィードバック情報の確認・活用方法について</b> .....		<b>19</b>
Q 5 4	「集計結果」には男女別の集計がありますが、この意味や活用法はどのようなものなのでしょうか。 ...	19

Q 5 5 共通教育科目の場合、「所属学部と到達度」に所属学部ごとの集計がありますが、この意味や活用法はどのようなものでしょうか。 .....	19
Q 5 6 T図の名称の由来について教えてください。 .....	19
Q 5 7 T図のアルゴリズムについて教えてください。 .....	19
Q 5 8 T図の下に記載されている「相関係数」とは何でしょうか。また、注意点を教えてください。 .....	19
Q 5 9 教員による成績評価と学生の自己評価の相関は高いほうがよいのでしょうか。 .....	20
Q 6 0 T図の中には、「成績と総合到達度」など“総合到達度”という項目がありますが、これは何でしょうか。 .....	20
Q 6 1 科目のそれぞれの到達目標と成績の関係を示す T 図から、何を確認すればよいのでしょうか。 .....	20
Q 6 2 「学習時間と到達度」の T 図では何を確認すればよいのでしょうか。また、この T 図をどのように活用すればよいのでしょうか。 .....	20
Q 6 3 「出席と到達度」の T 図では何を確認すればよいのでしょうか。また、この T 図をどのように活用すればよいのでしょうか。 .....	21
Q 6 4 「出席と到達度」の T 図が表示されません。なぜですか。 .....	21
Q 6 5 「GPA と到達度」の T 図は何のためにあるのでしょうか。 .....	21
Q 6 6 回答の信頼性を判断する質問項目はあるのでしょうか。また、Web 調査では信頼性は低下するのではないのでしょうか。 .....	21
Q 6 7 フィードバックされた情報では、教員側から見た学生への評価に比べて、学生自身による自己評価が高いように感じられます。こうした結果が出るのはなぜでしょうか。 .....	22
Q 6 8 学生の「学習時間」とは具体的にどのような作業をしている時間を指しますか。 .....	22
Q 6 9 T 図や棒グラフなど、フィードバック情報からどのようなことが読み取れ、また読み取った内容を授業改善にどのように活用できるのでしょうか。 .....	22
Q 7 0 FURIKA の結果に基づいて授業の改善を行っても、改善結果を反映できるのは翌年になってしまうのではないのでしょうか。 .....	22
Q 7 1 出席率の低い学生の回答は信頼性が低いと考えられます。出席率が一定以下の学生の回答をカットしたデータも提供してもらえないのでしょうか。 .....	22
Q 7 2 表示されるグラフが多いため、内容を読み取るのに努力を要すると感じます。もう少しグラフを整理し、表示数を減らすことはできないのでしょうか。 .....	23
Q 7 3 学位（教育）プログラム全体のフィードバック情報をプログラム全体で共有することはできないのでしょうか。 .....	23
<b>NEW</b> Q 7 4 FURIKA の結果は、FURIKA による学生の回答はあくまで自己評価に過ぎないのですから、学習成果に関する信頼できるエビデンスとして捉えることは難しいのではないのでしょうか。 .....	23
<b>NEW</b> Q 7 5 FURIKA のフィードバック情報の「読み方」は、教員だけでなく学生も学ぶ必要があるのではないのでしょうか。 .....	23
<b>2. 公開範囲について</b> .....	<b>23</b>
Q 7 6 複数の教員が担当する科目において、科目代表者のみがアンケートの結果を見ることが出来るという点は改善していただけないのでしょうか。 .....	23
<b>第 5 章 学生へのフィードバック情報について</b> .....	<b>24</b>
<b>1. 公開範囲・時期について</b> .....	<b>24</b>
Q 7 7 自分が履修していない授業科目の回答結果についても、今後の授業選択のために、見る事ができるようにした方がよいのではないのでしょうか。 .....	24

Q 7 8	4 年次生の後期および通年科目においては、結果の公開が卒業直前となってしまうので、FURIKA に回答することは学生にとっては無意味なのではないでしょうか。 .....	24
2.	学生への対応について .....	24
<b>NEW</b> Q 7 9	2018 年度の「DP 対応問題」はどうなりましたか。 .....	24
Q 8 0	成績と自己評価にずれが生じていた場合、成績について納得できない学生の対応はどのようにすればよいのでしょうか。 .....	24
Q 8 1	授業時間内で FURIKA を実施しようとしたのですが、すでに回答してしまっている学生がいます。どうしたらいいのでしょうか。 .....	25
Q 8 2	学生向けのフィードバック情報を見ていない学生がいるようです。もっと多くの学生たちに見てもらうことはできないのでしょうか。 .....	25

## 第1章 授業アンケート FURIKA について

### 1. 目的・趣旨について

#### Q1 授業アンケートの目的を教えてください。

A 授業アンケートの主な目的は2つあります。

1. 「教育改善」が1つ目の目的です。特に、ディプロマ・ポリシー (DP) とカリキュラム・ポリシー (CP) に基づき、各授業のコースデザインを組織的に改善していくという、本学の内部質保証体制を確立するためのひとつの情報源とすることが大きな目的です (組織的教育改善活動)。もちろん、従来の授業アンケートと同様に、教員個人が自身の授業を改善するために必要な情報を提供することも授業アンケートの重要な使命です。
2. 「学生の主体的・自律的な学習の支援」が2つ目の目的です。自身の学習状況・学習成果の振り返りの材料としてもらうことで (学生の自己評価)、学生が主体的・自律的に学ぶことを促します。

#### Q2 授業アンケートを新しくするのはなぜですか。その背景を教えてください。

A 授業アンケートを新しくする背景は、大きくは2点あります。

1. 2008 年の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」では、先進諸国の高等教育においては、教員が「何を教えたか」より学生が「何ができるようになったか」 (= 学習成果) を重視した教育の取り組みが進展していると述べられています。こうした教育は、「学生の学習成果を重視した教育」と呼ばれ、現在の高等教育政策において中心的な位置に据えられています。

このような動向をうけて、「教員がどう教えたか」から「学生が何ができるようになったか」へと評価軸も変わっています。そのため、授業アンケートにおいても、教員の板書の技術、話し方などの教え方の巧拙を問うものから、学生が何を、どこまで学んだか、という学生の学習成果に焦点を当てたものに変更していく必要があります。また、すでにこうした「学生の学習成果を重視した教育」の浸透に対応する授業アンケートを実施している大学も幾つかあるようです。

2. これまでの授業アンケートは各学部等がそれぞれ独自に実施しており、設問項目、回答のフィードバック方法など、全て学部ごとに異なっていました。そのため、データの全学的な活用がなされず、授業アンケートの結果がどのように授業改善につながったかをチェックする体制も全学的には構築されていませんでした。

この状況に関して、例えば 2007 年度の自己点検・評価結果に対する認証評価結果では、「すべての学部において、授業改善のための学生アンケート調査結果の活用が教員の自主性に任せられ、授業改善へ向けた組織的な点検が十分に行われていない」と述べられており、2014 年度の自己点検・評価への外部評価でも同様の指摘がなされています。

西日本最大規模の大学として、本学が担うべき社会的責任の大きさに鑑みると、長年にわたり指摘され続けてきた課題に対応することは、本学の教育改善において最優先するべき事項の一つであると考えられます。

#### Q3 授業アンケートに FURIKA という名称がついているのはなぜですか。

A FURIKA は、授業アンケートの設問項目だけでなく、フィードバック情報も含めたシステム全体を指します。学生、教員、学位 (教育) プログラムを含む福岡大学全体が、教育や学習の成果を振り返る (FURIKA える) ために活用してもらいたい、という願いから、この名称が付けられています。また、FURIKA は “Fukuoka University self-Reflection Index of Knowledge, Abilities, and Attitudes” の頭文字をとったものでもあります。

**Q4 これまでの授業アンケートとの主な違いは何ですか。**

A 複数ありますが、主な違いは以下の3つです。

1. 全学統一の実施体制のもと、全科目で実施する web 形式のものであること
2. 学生のパフォーマンスに焦点を当てたものであること
3. 得られたデータは担当教員個人の教育活動に限定せず、全学的・組織的な教育改善についても活用し、また学生自身にもフィードバックすること

**Q5 授業アンケートをWEB化したことで、回答率は下がりにませんか。**

A 一般的にはアンケートを紙媒体での実施から web に切り替えると、回答率は下がると考えられています。それをできる限り避けるため、授業アンケート実施にあたっては、先生方に以下のご協力をお願いいたします。

1. 紙媒体での実施と同様に、授業時間内に回答時間を設けること
2. 学生たちの回答状況を、リアルタイムで確認していただくこと

**Q6 「教員のパフォーマンス」や「学生のパフォーマンス」という用語が使われていますが、「パフォーマンス」とは何ですか。**

A 英語の“performance”には「遂行」「成就」「業績」「成果」「できばえ」「実績」などのさまざまな意味がありますが、特に学習評価のひとつである「パフォーマンス評価」においては、「パフォーマンス」は「遂行ぶり」や「遂行の成果物」の意味で使われています。ここではそれに準じ、「学生のパフォーマンス」という語は、「学生の授業における学習の状況（どう学習したか）や学習の成果物（何を得たか）」という意味で用いています。また、「教員のパフォーマンス」という語は、板書、説明、時間管理、教室環境の維持など、授業全般にわたる教員による遂行を指すものとして用いています。

**Q7 「学生のパフォーマンス」を確認することに焦点を当てているのはなぜですか。**

A それは、大学教育が「教員が何を教えたか」よりも、「学生が何を学んだか」を重視するように変化してきたこと (cf. 2008 年の中教審答申「学士課程教育の構築に向けて」) によっています。これにより、授業改善についても、例えば学生がどれだけその授業に満足したか、といった指標のみに照らして当該授業の改善点を抽出するような考え方から、むしろその授業に期待される学習成果を学生が得ているかどうか、という観点からその授業の改善点を判断するような考え方へと変わりつつあります。FURIKA が「学生のパフォーマンス」を確認することに焦点を当てているのは、このような観点に基づいてのことです。

**Q8 学生による主観的な評価を聞くことに、どのような意味がありますか。**

A 授業の到達目標への到達度について学生が自己評価を行うことは、その授業が何を目的としたものであったか、自分が何を、どこまで学んだか、など、授業や自分自身について俯瞰的な視点から捉え直す機会となります。そして、こうした視点から自分自身の学習を振り返る経験を、授業ごと、学期ごとに積み重ねていくことによって、学生たちは次第に、学習した内容を関連付けたり、自身の学習の傾向や課題を発見したりしながら、より主体的・自律的な学習者として成長していくと考えています。学生が自己評価を通じて自己の学習を振り返ることによる一つの意義は、このようなものだと考えています。

なお、学生が自身の課題や傾向を的確に把握しながら目的を持って学習できるようになるためには、彼らが行う自己評価も的確なものである方が望ましいと言えます。そのため、授業の到達目標は、学生たちが適切に自己評価しやすいものである必要があります。

一方、学生たちには、自身の自己評価能力を洗練させていくことが期待されます。学生たちの自己評価の結果は累積され、自分自身の自己評価の結果を閲覧できるようになっていますので、教員側は学生たちに、適宜結果

を参照し、自己評価と成績に大きな齟齬がないかを照らし合わせるように促してください。

また、学生が自己評価を行う二つ目の意義として、そのデータが、教員にとって個々の授業単位の改善のための情報源となる、ということがあげられます。到達度の確認は、学生たちがどの程度こちらの意図通りに学んでくれたか、を把握するための素材を提供してくれます。授業アンケートでは、到達目標ごとに、こういった学生がどのように回答したかを分析できるようになっていますので (ex. 成績層ごとに回答分布がどうなっているか)、こうした把握を通じて、次年度以降の授業設計、到達目標の設計、成績評価の方法、等の見直しや改善を行うことが可能になります。

### Q 9 三つのポリシーとの関係はどのようになっていますか。

A 三つのポリシーのうち、DP と CP に深く関わっています。FURIKA によるアンケートで学生にそれぞれの授業の到達度を確認することは、Q8 でも述べたように学生自身にとってメリットがあると考えていますが、同時に、教員側の教育改善にも大きな貢献が得られると考えています。それは、プログラム単位での教育改善です。Q1 と関わりますが、到達目標への到達度に関する設問は、学位(教育)プログラム単位での教育改善のための情報源となります。すでに学部・学科では DP、CP の策定を終えておりますが、アカウンタビリティの一環として、今後、それぞれが適切に設計されているかどうか、そして、期待した成果が得られているかどうかについて継続的に確認していくことが求められてきます。しかし、DP や CP のように抽象度の高いものを対象に、その適切性や成果を十分に検証するのは容易なことではなく、根拠資料の収集には大規模な調査などの大きな労力が必要となる恐れもあります。一方、授業アンケートは、個々の授業のそれぞれの到達目標への到達度を通じて、それぞれの授業が DP の達成に向けて適切な貢献を果たしているかどうか、をボトムアップ的な確認を可能にすることで、こうした検証作業のための基礎情報を提供できます。

## 2. 設問項目について

### Q 10 教員のパフォーマンス(板書の巧拙や声の聞きやすさなど)に関する設問は必要ないのですか。

A 教員のパフォーマンスに関する確認も重要だと考えていますが、それらは学期末にアンケートを行っても受講生にフィードバックすることができません。授業期間の序盤や中盤で実施していただく方が効果的で、かつ担当教員ご自身が個別に実施していただいた方が、迅速にフィードバックできると考えられます。

以上を踏まえ、教育開発支援機構では、教員のパフォーマンスに関する確認については FU ポータルのアンケート機能等で担当教員が随時実施・活用できるよう、アンケートのひな形を用意するなどの支援を行う予定です。

### Q 11 出席状況に関する設問は必要ないのですか。

A FURIKA を通じて回答する際に、学生は FU ポータルにログインします。回答データの保存時には学籍情報は暗号化されるのでアンケート自体は実質的に無記名式ですが、回答データをシステム上の出席データのみならず、単位の取得状況や入学形態と関連付けて分析するなど、記名式に近い分析が可能です(詳しくは、Q20、Q21 をご参照ください)。したがって、アンケートで出席状況に関する設問はありません。

なお、出席率は、各教室(一部の実験・実習室を除く)に配置されている「出席調査用カードセンサー」および FU ポータル上の「教育・研究」のメニューである「出席管理」のシステム(出席調査用カードセンサーと連動)を基に算出しています。そのため、上記システム以外で出欠管理を行っている場合(先生ご自身が出席管理をされている場合など)においては、先生がご自身で上記システムに出席情報を入力されることで、FURIKA での分析がより正確なものとなります。

### Q 12 設問項目3(積極性に関する設問)への回答から何が分かるのですか。

A “Active 福岡大学”を掲げる本学にとって、学生の積極性を引き出すような教育を行っていくことは重要なミツ

シヨンの一つだと言えます。また、この項目を他の項目と組み合わせて見ることで、さらにさまざまな授業改善のヒントを提供してくれると考えています。

例えばある授業で、「学生の積極性は高いにもかかわらず、学習時間は短い」といった傾向が見られた場合、その授業では、学生たちが積極的な参加意識を持っているのにそれを十分に活かしていない可能性もあります。学生たちの高い参加意識を踏まえ、さらに課題を与えて学生により深く学習させることができるかもしれません。このように、他の項目を参照しながら確認することで、今後の改善の方向性を探ることもできるでしょう。

### Q 1 3 設問項目 4 (理解度に関する設問) は必要ですか。

A 到達目標に記載されるのは、授業内容のうち原則として成績評価に関するものですので、かならずしも授業全体を包括しているとは限りません。従って、「知識・理解」に分類される全ての到達目標を足し合わせても、授業全体に関する理解を構成しない可能性があります。また、理解度に関する設問によって、個別の知識に還元されない授業全体に関する学生の理解度を確認することは、授業全体の難易度等に関する今後の授業改善のための情報源となりうるでしょう。

なお、積極性に関する設問と同様、理解度についても、他の項目と比較参照することによって、さらに授業を多角的に分析できるようになる可能性があります。例えば、到達目標のうち「知識・理解」に関するものについてはいずれも理解度が高いものの、授業全体の理解度が低い場合には、個々の内容の関係や背景が学生たちには十分に把握されていない可能性がありますし、逆に全体の理解度が高いにもかかわらず「知識・理解」に関する個々の到達目標については到達度が低いのであれば、学生が安易に「分かったつもり」になってしまっているという可能性もあるでしょう。

このように、授業アンケートは授業改善につながる課題や方向性をピンポイントで一問一答式に示してくれるわけではありませんが、提供される情報はそれぞれに関連性を持っているので、それらを組み合わせたり、探索的に分析したりすることによって、教育改善のためのさまざまな素材として活用することが可能です。

### Q 1 4 設問項目 5 は「自由記述」ではないのですか。

A この設問は、学生がその授業で何を学んだのか、という学習成果を振り返って記述するためのものであり、授業への感想や教員へのメッセージなど、何でも書いて良いという趣旨のものではありません。なお、授業や教員への改善要望など、学生が匿名で大学に対して伝えたい事が生じた場合には、それを受け付ける窓口を別途設けることを検討する予定です。

### Q 1 5 設問項目を新たに追加することはできますか。

A 学生の学習活動や学習成果を確認する設問であれば、学部・学科独自の設問を追加することができます。ただし、設問項目の追加は教員個人単位ではなく、学部単位でお願いしています。

### Q 1 6 FURIKA では、その授業の履修動機や、その授業への改善要望を聞く項目がありません。それらを知りたいのですが、項目の追加はできないのでしょうか。

A FURIKA は学生の学習成果の把握を目的としているため、現時点では、履修動機、改善要望などの項目を追加する予定はありません。しかし、担当の先生ご自身が個別に授業内で受講生に確認することは可能です。FU ポータルのアンケート機能やミニツツペーパーなどをご活用下さい。

## 3. データの活用について

### Q 1 7 学生の匿名性は守られますか。

A 守られます。学籍情報は、教育開発支援機構の教学 IR データベースに格納される際に暗号化されますので、担

当教員を含めた関係者が学生個人を識別することはできません。詳しくは、Q20 の回答もご参照ください。

### Q18 授業アンケートの結果は教員の評価に使われますか。

A 授業アンケートの実施にあたり、「授業アンケート実施に係る遵守事項」を定めています。当遵守事項には、学生への不当な処遇の禁止などに加え、教員への不当な処遇の禁止について取り決めてあります。これは、授業アンケートを実施したことによって得られた情報をもとに、教員に不当な処遇や対応を行ってはいけないことを記したものです。

また、学生の学習状況は、担当教員のパフォーマンスだけで決まるものではなく、プログラムにおける科目の到達目標の位置づけや達成レベル、関連科目との連携、クラスサイズ等のさまざまな要因にも左右されます。従って、授業アンケートの結果だけをもって、教員の教育能力を十分に把握することは考えられません。

### Q19 回答したデータは、どのように保管されますか。

A 授業アンケートの回答データは、教育開発支援機構の教学 IR データベースに保管されます。ここでは、「教育開発支援機構教学 IR 室における教育情報取扱要領」に従ってデータは取り扱われます。当要領は、教学 IR 室が扱うデータは特定の個人を識別できないよう暗号化することを定めるものであり、授業アンケートを通じて収集されたデータも、これに即した個人情報の暗号化が行われた後にデータベースに入るようになっています。基本的なフィードバックに関してこのデータベースから自動的に構成されます。

### Q20 回答したデータは、どのように分析されますか。

A 授業アンケートの回答データの分析は、教育開発支援機構の教学 IR 室が担当します。基本的な分析は自動的に行われるようになっており、授業科目・学位（教育）プログラム・学生個人それぞれにおいて、集計・平均化・可視化されます。この分析結果がフィードバックされることとなります。また、匿名性を保ったまま、各種の教務情報と紐づけて分析することも可能です。具体的には、GPA、当該科目の成績、出席状況、学部・学科、学年、性別、入試種別、進路・就職、などの既存のデータと紐づけることによって、どういった学生がどこまで学んでいるか、についてきめ細やかに把握することができます。

### Q21 回答したデータは、誰にフィードバックされますか。

A 担当教員、学位（教育）プログラム責任者、学生、の三者にそれぞれに対応したフィードバックがなされます。

担当教員に対しては、担当した授業科目について、全体的な特徴や傾向だけではなく、どういった学生が、どの程度学べているか、きめ細かく把握できるようなフィードバックをお返しします。例えば、学生の成績、GPA、学年・学部など、その科目のカリキュラム上の位置づけに照らして特に焦点となる学生層が、期待した学習成果を得ているかどうか、について確認することが可能です。

学位（教育）プログラム責任者に対しては、単にそれぞれの設問の単純集計や相関に留まらず、それぞれの授業が、学部・学科の DP に記載された学部・学科全体の到達目標に、どの程度、どのように寄与しているか、を具体的に示すことができるようになっています。

学生に対しては、学生個別に集計し、回答者本人に対してフィードバックをお返しいたします。到達目標を含めた学習内容・結果の自己評価や振り返りは、自律的な学習の基盤です。学生にフィードバックを行うのは、これらの能力を高めるためです。フィードバックされた情報を用いて、例えば「その授業で何を学んだか」の自己評価を、他の学生の自己評価や教員からの客観的な評価と比較することを通じて、より適切に自身の学習状況や傾向、特徴などを把握できるようになってもらいたい、と考えています。

### Q22 回答したデータは、どのような形式でフィードバックされますか。

A フィードバックされる情報には、回答を単純集計した棒グラフ、到達度と成績の関係を示す図、DPへの到達

状況を示す DP グラフ、学んだことの記述、の四つが含まれています。前半の3つのグラフは、個別の授業単位、開講年次別の授業単位、講義・ゼミなどの属性単位、などのさまざまな切り口で絞り込まれた科目群・クラス群について表示されます。

## 第2章 実施について

### 1. 実施に関すること

#### Q23 授業中に、授業アンケートを実施する必要はあるのでしょうか（授業時間外に行うほうがよいのではないのでしょうか）。

A 授業時間内に授業アンケートを実施することは、学生が自身の学習成果に関してできるだけ正確な自己評価を行うために望ましいと考えております。というのも、単に設問を提示して学生に回答させるというだけでは、学生が正確に自己評価を行うことができるとは言い切れないからです。例えば、到達目標の文言が示している内容を十分に理解できていない場合や、授業における自身の学習内容を適切に把握できていない場合などでは、正確な自己評価を十分に期待することはできません。

不正確な自己評価をできるだけ避けるためには、学生が回答する前に、適切な回答を行うための準備が整っていることが望ましいと考えられます。その準備の中心となるのが、教員が行う「授業の総括」を聞くことです。総括を通じ、学生たちは、到達目標が意味するところや基準を正確に理解し、授業内容と自身の学習行動を想起しやすくなり、より適切な自己評価を行うことができると考えています（「授業の総括」の方法については、Q30をご参照ください）。

加えて、授業時間外に授業アンケートを実施している大学もありますが、回答率が著しく低下することが明らかになっております。

以上の理由によりまして、授業の総括を行っていただいた上で、授業時間内に授業アンケートを実施することは望ましいことではありますが、授業の進行状況などに合わせまして、先生方のご裁量のもとで柔軟に対応していただければと思います。

#### Q24 ゼミや実習でもアンケートを行う必要がありますか。

A FURIKA の実施対象科目は、ゼミや実習も含めた全科目となっております。これは、FURIKA が学生のパフォーマンスに焦点を当てていることによります。FURIKA では、学生にもアンケート結果がフィードバックされ、自分が何をどれだけ学んだのか、について学期ごと、学年ごとなどで確認ができるようになっており、学生が自分の学習状況を適切に確認するためには、全科目でのアンケートの実施が必要です。

また、学位（教育）プログラムの検証という観点からも、全科目でのアンケートの実施が必要となります。学位（教育）プログラムが適切に機能しているかどうか、を確認するためにも、ゼミや実習も含む学位（教育）プログラム全体を通して学生たちが何をどれだけ学んだのかを把握する必要があるからです。

#### Q25 FU\_Wi-Fi が整備されていない教室や屋外実習などでは、どのように実施すればよいですか。

A FU\_Wi-Fi が整備されていない環境では、授業時間内でアンケートを実施する必要はありません。試験開始前までに、PC 教室や自宅の PC などから授業アンケートに回答するよう指示をしてください。

ただし、学生の振り返りの質を高めるため、「授業の総括（Q30を参照）」については可能な限り授業時間内に実施してください。

また、アンケートを実施した回に、PC やスマートフォンなどを持っていなかった学生や、授業を欠席した学生にも、同様の対応をお願いいたします。なお、担当教員はアンケートシステムを通じて、アンケートの回答率や回答学生数を随時確認できるようになっています。回答率が著しく低い場合、できるだけ学生に回答を促してください。

**Q 2 6 オムニバス形式の授業の場合、どのように実施したらよいですか。**

A オムニバス形式の授業では、科目代表者以外の先生が FURIKA で学生の回答状況を確認することはできません。科目代表者以外の先生が 14 回・15 回目の授業を担当される場合には、可能であれば科目代表者の先生もご同席の上、回答状況の確認をお願いいたします。もしそれが難しい場合には、学生へ回答状況をお尋ねいただいた上で、アンケート回答の実施時間をご調節くださいますようお願いください。

なお、授業の総括についても同様に、科目代表者以外の先生が 14 回・15 回の授業を担当される場合には、実施が困難なケースが生じることが予想されます。科目代表者の先生にご同席いただき、総括を実施していただくか、それが難しい場合には、総括を省いていただいても構いません。

**Q 2 7 アンケートの回答期限を設けているのはなぜですか。**

A 定期試験を受ける前と後では授業の印象が異なってしまうおそれがあるからです。同じ授業を受講した学生が試験前と試験後にバラバラに回答できるようにしてしまうと、回答条件が異なるものになってしまいます。そのため、回答期限は定期試験期間前までとしています。

**Q 2 8 授業アンケートは、定期試験後に実施するほうが正確な回答が得られるのではないのでしょうか。**

A 回答の正確さという観点からすると、確かに授業アンケートは定期試験後に実施した方が望ましいと考えられます。しかしながら、定期試験後のアンケートの実施は、以下の二つの点で課題を含んでいます。

一つ目はアンケートの回答率に関する課題です。授業時間外に各自で授業アンケートの回答を求めることは、他大学でも実施されておりますが、回答率が著しく低下することが明らかになっております。

二つ目は、授業アンケート FURIKA の目的のひとつが、学生の自律的な学習の支援にあることです。FURIKA では、授業の第 14 回目、第 15 回目を終えた段階で、アンケートへの回答を通じて学生に授業全体を振り返ってもらうこと、そして、振り返りを踏まえて授業 15 回（ないし 14 回）全体にわたる自己の学習の評価を行ってもらうことが狙いとなっています。しかし定期試験後にアンケートを実施してしまうと、学生たちの回答は、授業全体の自己評価よりも、むしろ定期試験の出来不出来に関する局所的な自己評価に大きく影響されてしまう恐れがあります。そうすると、自分の学習全体を振り返り、自己評価を行う、というプロセスが十分には行われなくなってしまう可能性があります。このプロセスが不十分だと、自己評価の経験を重ね、年次を経ることによって、自己評価の能力そのものを継続的に高めていく、ということもまた難しくなってしまいます。

以上のように、回答率の向上と、授業全体への振り返りの促進という観点から、この時期での実施が現状では最善であると考えております。しかしながら、今後の実施状況を見ながら、回答期間の適切性については引き続き検討していきます。

**Q 2 9 通常の授業と異なるスケジュールで実施する科目もありますが、授業アンケートの回答は、決められた回答期間（前期・後期 14～15 回目の授業期間）にしかできないのでしょうか。**

A 通常の授業と異なるスケジュールで実施する科目については、別途回答期間を設けることができます。お手数をおかけいたしますが、ご所属の学部事務室までご相談ください。

なお、集中講義科目については別途回答期間を設けていますので、担当者の方には別途ご案内いたします。

**Q 3 0 授業の総括とは、具体的にどのようなことを行えばよいのですか。**

A 授業の総括は、学生が授業をより深く振り返り、自身の学習成果に関してできるだけ正確に自己評価できるように行ってもらうものです。授業の進捗によっては時間的な制約などで実施が難しいという場合もあるとは思いますが、学生の自律的な学習者としての成長を支援するという観点からも、可能な範囲でぜひ実施をお願いいたします。

総括の具体的な内容例としては、たとえば以下の3点です。

### 1. この授業の狙いが何であったか

授業全体の狙いの把握を通じて、なぜそれぞれの到達目標に記載されたような能力を身につける必要があるのか、の理解を学生たちに促してください。

ただし、到達目標の数があまり多くない科目などでは、科目全体の狙いの説明と以下の「2」で行う到達目標の説明が重複する場合があります。そういった場合には、授業全体の狙いの説明については適宜省いてくださって構いません。

### 2. それぞれの到達目標の具体的な意味内容と到達基準

到達目標の意味する内容が学生には伝わりにくかったり、到達したと判断する基準が分かりにくかったりすると、学生が適切な自己評価を行うことが難しくなります。そこで、特に到達目標の表現の抽象度が高かったり、自己評価が難しいと先生方ご自身が判断された到達目標については、それぞれの到達目標に記載された能力が、具体的にどんなものであるか、また、何がどれだけであればその到達目標に到達したと言えるのか、について補足説明をお願いいたします。

### 3. 各回の授業でどんなことを扱ったか

それぞれの到達目標に記載された能力が、どの回の授業の、どの内容と関わりがあるのか、という観点から、「授業の内容」と「到達目標が求める能力」の対応関係について重点的に説明してください。学生の回答画面には「授業計画」というボタンが設置されており、回答中の科目のシラバスに記載された「授業計画」を簡単に参照することができます。必要に応じて、「授業計画」の確認を学生に促してください。

なお、到達目標が15回の授業全体を通じて身につけていくような能力になっているなど、特定の回の授業の内容とは関わりがあまりない場合には、この説明は適宜省いてくださって構いません。

以上の3点はあくまで例となります。なお、時間的には全体で10分～15分程度を基本的な目安としていますが、授業の内容や時間的余裕などの状況に応じて、先生方のご裁量のもとでの柔軟な実施をお願いいたします。

#### Q 3 1 FU\_Wi-Fi へのつながり方がわかりません。

A 接続する機器の「設定」で、Wi-Fi を ON にし、「FU\_Wi-Fi」を選択してください。ログイン情報が求められますので、福大 ID のアカウント名およびパスワードを入力し、接続してください。

詳細については、情報基盤センターウェブサイト (<https://www.ipc.fukuoka-u.ac.jp/service/wifi/>) をご確認ください。

#### Q 3 2 学生の回答状況は、スマートフォンでないと確認できないのですか。

A 授業アンケート実施中には、できる限り学生の回答状況を確認し、学生の回答率が向上するようご協力をお願いしております。スマートフォンをお持ちでない先生は、ご負担のない範囲で構いませんので、もし可能であればノート PC やタブレット等を教室にご持参いただき、回答状況の確認にご協力いただければ幸いです。それが難しい場合には、学生の回答状況を目視でご確認いただくか、あるいは学生に口頭で直接お尋ねいただき、アンケート回答の実施時間をご調節くださいますようお願いいたします。

#### Q 3 3 回答状況・結果のページで回答済・回答率が2段で出るのはなぜですか。

A 上段は「履修者数（名）、回答済（名）、回答率（％）」、下段は「回答中（名）、回答済（名）、回答率（％）」が表示されますが、この回答率が上下で異なっております。上段は「履修者数に対する回答率」、下段は「回答中の

学生に対する回答率」を表示しております。なお、「回答中の学生」とは、FURIKA にアクセスして当該科目の「回答」ボタンを一度でも押した学生を意味しています。

授業アンケート実施中には、主に下段の回答率をご参照いただくことで、教室の回答状況を確認いただけます。一方で、全対象者（履修者）での観点で確認されたい場合は、上段において確認いただけます。

#### Q34 学生の回答状況を確認しようとしたのですが、科目名が表示されません。なぜですか。

A その科目がオムニバス形式の授業である可能性があります。オムニバス形式の授業では、科目代表者以外の先生が FURIKA で学生の回答状況を確認することはできません。ご不便をおかけして恐縮ですが、科目代表者以外の先生が 14 回・15 回目の授業を担当される場合には、授業アンケートの実施の際、学生の回答状況を目視でご確認いただくか、あるいは学生に口頭で直接お尋ねいただき、アンケート回答の実施時間をご調節くださいますようお願いいたします。

なお、授業アンケートは年 2 回[前期（7 月）・後期（12 月～1 月）]実施しております。前期実施期間中は、ご担当の前期授業科目（集中講義を含む）が、後期実施期間中は、ご担当の後期および通年授業科目（集中講義を含む）が回答確認画面に表示されます。

#### Q35 教員が学生の画面を見ることが出来れば、指導しやすいと思いますが、可能でしょうか。

A ご不便をおかけして恐縮ですが、現状では教員が学生の回答画面等を FU ポータル上でご確認いただくことはできません。学生メニューの画面イメージにつきましては、『『授業アンケート FURIKA』教員用マニュアル（実施方法とフィードバックの活用方法）』に掲載していますので、ご参照ください。本件は今後の課題とさせていただきます。

#### Q36 実施する際に、特に気をつけることを教えてください。

A FURIKA は、学生自身による率直な自己評価が基本となりますので、学生を特定の回答に誘導するような言動は控えてください。

#### Q37 授業アンケートの担当部署はどこですか。

A 実施の主体は、教育開発支援機構です。ご不明な点などございましたら、教育開発支援機構事務課（A 棟地下 1 階）までお問い合わせください。

Eメール：kyokiko@adm.fukuoka-u.ac.jp 内線：2852・2853

## 2. 学生への対応について

#### Q38 スマートフォンを持っていない学生には、どのように指示をしたらよいですか。

A ノート PC やタブレットなど、教室内で FURIKA にアクセスすることのできる端末を持っている場合には、負担でない限りそれを持って来るようにアンケート実施の前の週までに指示しておいてください。スマートフォンを含め、教室内で FURIKA にアクセスすることのできる端末を持っていない学生には、試験開始前までに、PC 教室や自宅の PC などから回答するよう指示しておいてください。

#### Q39 本人以外（友人など）のスマートフォンから、アンケートの回答をすることはできますか。

A 授業アンケート FURIKA は、FU ポータルにおける認証システム内において実施しております。他人が所有するスマートフォンにおいて、個人 ID やパスワードが必要なログインを行うことは、IT リテラシーとして望ましくないことです。スマートフォンを忘れるなどで、授業時間内に回答できない場合には、大学の PC 教室や自宅の PC などから回答するようお伝えください。

**Q 4 0 FURIKA へのアクセスは、FU\_Wi-Fi からの接続でないといけません。**

A 必ずしも FU\_Wi-Fi からの接続である必要はありません。学生が個人で契約しているキャリア回線（DoCoMo、au、Softbank 等の回線）でも FURIKA にアクセスすることは可能です。

なお、キャリア回線による接続は契約プランによっては料金が発生する場合があります。キャリア回線を用いた FURIKA へのアクセスが学生自身の意思に基づくものであれば、それを止める必要はありませんが、キャリア回線で FURIKA にアクセスするよう学生たちに指示することはやめてください。

**Q 4 1 F Uポータルにログインできない学生には、どのような指示をしたらよいですか。**

A F Uポータルにログインできない理由として、以下 2 つの原因が考えられます。原因に応じた指示をお願いいたします。

**1. 福大 I Dのアカウント名を大文字で入力している**

福大 I Dのアカウント名を小文字で入力するように指示してください。

（例：学籍番号 LC190001 の場合、“lc190001”と入力）

**2. 福大 I Dのパスワード有効期限が切れている（あるいはパスワードを覚えていない）**

学生証を持参の上、情報基盤センター(文系センター低層棟 3 階)、学生課、もしくは学部事務室で仮パスワード(当日限り有効)を発行し、パスワードの更新を行うよう指示してください。また、その上で、試験開始前までに、授業アンケートに回答するよう指示をしておいてください。

**Q 4 2 F Uポータルにログインできたのに、FURIKA にアクセスできない、という学生がいます。どうしたらよいでしょうか。**

A セキュリティの関係上、「ヤフーアプリ」からでは FURIKA にアクセスできません。FURIKA にアクセスできない原因は今のところシステム上の問題である可能性が最も高いため、FURIKA にアクセスできないという学生には、IE、Google Chrome、Safari、Firefox、Opera、もしくは端末にあらかじめインストールされているブラウザ（通常、地球のアイコンであることが多い）からアクセスするよう指示してください。それでも FURIKA にアクセスできない場合には、試験開始前までに、PC 教室や自宅の PC などから回答するよう指示をしておいてください。

**Q 4 3 似た名称の科目がある場合、学生が間違っして回答する恐れがあるのではないのでしょうか。**

A ご指摘のとおりです。このような問題を防ぐため、科目一覧に「曜日時限・科目名」を表示するとともに、回答画面においても「科目名・曜日時限・教員名」を表示するようにしております。回答を開始する前に、「科目名・曜日時限・教員名」を確認するよう、学生に指示していただきますようお願いいたします。科目選択の間違いが多発するようであれば、今後の課題とさせていただきます。

**Q 4 4 科目名を誤って選択し、回答をしてしまった学生がいます。どうしたらよいでしょうか。**

A 一度回答を終え登録ボタンを押してしまうと、学生または教員の方で回答を修正することはできません。その場合は、教育開発支援機構事務課（A棟地下 1 階）に問い合わせるよう指示してください。

**Q 4 5 学生が回答をやり直すことは可能でしょうか。**

A 回答を終え「登録」ボタンを押すと、その授業科目の回答は確定されます。一度確定されると、学生または教員の方で回答を修正することはできません。学生から回答をやり直したい旨の申し出があった場合は、教育開発支援機構事務課（A棟地下 1 階）に問い合わせるよう指示してください。

**Q46 「科目一覧」に履修している科目名が表示されないという学生がいます。どうしたらよいでしょうか。**

A 所属している学部の学部事務室に問い合わせるよう指示してください。

**Q47 学生が回答の途中でログアウトした場合は、その回答はどうなるのでしょうか。**

A 回答の途中でログアウト等により回答画面から離れた場合には、もう一度回答することになります。現状では、回答途中での保存機能はありません。実施状況を確認し、必要性が高ければ、今後の課題とさせていただきます。

**Q48 学生からFURIKAに関する問い合わせがあった場合は、どうしたらよいのでしょうか。**

A 教育開発支援機構事務課（A棟地下1階）に問い合わせるよう指示してください。

## 第3章 設問5（記述式設問）の公開について

### Q49 設問5への回答のうち、どのような記述内容を公開すべきかについて指針はありますか。

A 基本的には公開した記述内容を読むことで、受講生たちの今後の学習姿勢の改善に向けた参考につながるかと判断できるものがあれば、どのようなものでも構いません。こういった記述内容がどのように参考になると判断されるかは、その授業の学問的特性や担当される先生方の教育観によって異なってくると考えられますので、先生方ご自身のお考えに沿ってご判断いただければ、十分に学生たちの刺激になるだろうと期待しています。

なお、選択の際は、以下の点についてご留意をお願いいたします。

- ◆ 学生個人を特定できるような記述内容は選ばないで下さい。
- ◆ 誤字、脱字、構文の乱れなどについては訂正できません。また、文章全体の一部のみを公開することもできません、すべて原文のまま公開されますので、その点まで考慮して公開に資するものであるかどうかのご判断をお願いします。
- ◆ 選択する数についての目安は特にございませぬ。

### Q50 設問5への回答に、「学んだこと」とは必ずしも言えないようなものが含まれています。しかし記述内容が優れており、受講生に公開したいのですが、可能でしょうか。

A 回答となる記述内容の中には、「学んだこと」には必ずしも含まれないような、感想、質問、意見等の記述内容も書かれていることも想定されます。原則的には「学んだこと」をピックアップしていただきたいと考えていますが、特に優れており、公開することに大きな効果が期待できると先生方のご判断されたものについては、先生方のご判断を尊重させていただきます。ただし、それらはあくまで「例外」ですので、できる限り少数にとどめてくださいますようご協力をお願いいたします。

### Q51 設問5への回答に、記述内容が似たものが複数ありました。この場合、一つだけを選んで公開すべきなのでしょうか。

A あえて複数公開することに意味があると先生方のご判断された場合には、必ずしも一つに絞り込む必要はありません。しかしながら、ほとんどの記述内容がほぼ同内容になってしまっている、といった公開選択は可能な限り避けて下さい。

### Q52 設問項目5に対する回答を、受講生にフィードバックするのはなぜですか。

A 担当教員は、設問項目5への記述回答のうち、学生の学習に資すると判断したものについて、その科目を受講した学生（ただし、設問項目5への回答を記述した者に限る）に公開することができます。その理由は、学生たちが同じ授業からも視点や姿勢が違えばさまざまな異なる学習があり得ることに気づいたり、授業に対する学生の観点や学習観を相対化したり、より深くアクティブな学習に向けて意識を高めたりしていくことが期待されているからです。

たとえば、ある学生が自分にとってあまり多くの成果が得られなかった授業科目があり、しかもそれは授業や教員の側ではなく、むしろ自分の受講姿勢や学習姿勢に要因があったとしましょう。しかしその場合でも、その学生が自分自身の受講姿勢や学習姿勢を相対化することができなければ、要因が自分にあることも気づきにくいはずで、ですから、他の学生がその授業から、自分では気づけなかった観点から豊かな気づきや成果を得ていることを知ることは、自分自身の受講姿勢や学習姿勢に改善の余地があることを発見するよう促すことにつながります。このように、他の学生がこの授業から何を学んだか、を知ることを通じて、学生が自分自身の学習姿勢をメタ認知し、今後の学習の改善に活かされることが期待されます。

**Q53 設問項目5は、他の学生の参考になるのであれば、広く閲覧できるようにした方がよいではないでしょうか。**

**A** 以下の理由から、現時点では実際にその授業を受講し、さらに FURIKA へ回答を記入した学生のみに公開を制限しています。

理由は主に、FURIKA で公開される情報は、あくまで自分自身の学習に照らして振り返ってもらいたい、という趣旨のものであるということによっています。その授業を受け、実際に自分自身が何を学んだかをしっかり考えた（FURIKA に回答した）という経験があってはじめて、他の学生が何を学んだか、という情報を自分自身との比較のために有効に活用することができると考えています。

2018年度は「設問項目5」の記述内容は、同じく「設問項目5」に回答した学生のみに FURIKA での公開範囲が限定されていましたが、「設問項目5」の記述内容に関して、実際に多くの先生方から「質が高かった」というご意見をいただいたことをうけて、2019年度からは「設問項目5」に回答していない学生にも公開範囲を拡張いたしました（ただし、FURIKA でその科目のアンケートには回答しておく必要はあります）。

なお、FURIKA による公開とは別に、担当教員が教育改善等の目的で FURIKA のデータを学内・学外に公開する場合、担当科目の「設問項目5」の記述内容を併せて公開することは認められております。学内・学外への情報公開については、『授業アンケート FURIKA 教員用マニュアル（実施方法とフィードバックの活用方法）』に記載の「福岡大学 授業アンケート実施に係る遵守事項」をご参照下さい。

## 第4章 担当教員へのフィードバック情報について

### 1. フィードバック情報の確認・活用方法について

#### Q54 「集計結果」には男女別の集計がありますが、この意味や活用法はどのようなものでしょうか。

A 科目として受講生全体の回答平均が高くても、より詳細に見るとそうではない、という状況がありえます。例えば現在の福岡大学では、特に卒業率などにおいて女子学生の方が男子学生よりもパフォーマンスが高い、という傾向が見られていますが、科目によっては男女によって極端な差があることもありえます。そうした差異の有無を確認していただくため、男女別の集計を行っています。

#### Q55 共通教育科目の場合、「所属学部と到達度」に所属学部ごとの集計がありますが、この意味や活用法はどのようなものでしょうか。

A Q54 とほぼ同様ですが、たとえば科目として受講生全体の回答平均が高くても、実際には特定の学部の学生たちの回答平均が高く、別の学部の学生たちの回答平均はかならずしも高くない、という状況がありえます。しかしながら一般的に、共通教育は全ての学部の学生が学ぶものですので、特定の学部の学生にのみ学びやすい、学びにくい、ということができるだけ少ないことが望ましいと考えられます。このような見地から、受講生全体の傾向だけではなく、学部によって学生のパフォーマンスに極端な差が生じていないかどうか、を確認していただくためにこの項目を設けています。

#### Q56 T図の名称の由来について教えてください。

A T図は散布図を5×5のマスマ目上に抽象化したグラフですが、このような形式のグラフは実は既存の一般的なものではありません。今回 FURIKA のフィードバック情報を提供するにあたり、より適切な表示形式を検討し、結果として本学で独自に開発したのが T図です。「T図」の名称は、学習の「到達度 (Toutatsu-do)」を中心に示すものであることと、開発者の氏名（工学部の鶴田教授）から、名付けています。

#### Q57 T図のアルゴリズムについて教えてください。

A T図作成のアルゴリズムは少々複雑であるため、アルゴリズムの詳細をここで紹介することはできませんが、基本的には「絶対数」ではなく人数の「割合」に応じた色分けをしています。まずマスマ目のうち、最大の人数が分布しているものを最も濃い色で着色し、続いて、それより少ない人数を最大で5段階にクラス分けしたうえで、それぞれの段階に応じた色を割り当てています。

なお、色の濃度はそれぞれのクラスの人数の相対的な大小を示しており、絶対数ではありませんので、色の濃度からはそのマスマ目にどれだけの学生がいるのか、は分からなくなっている、という点にご注意ください。マスマ目の色の濃度が示す人数は、クラス規模によって異なりますので、仮にマスマ目の色の濃度が同じでも、それらが同規模の学生がいることを示しているとは限りません。

#### Q58 T図の下に記載されている「相関係数」とは何でしょうか。また、注意点を教えてください。

A 相関係数は、相関関係の程度を表す指標です。数値は $-1 \sim +1$ の範囲となり、この数値が2つの変数の関連性の強さを把握する目安となります。相関係数が1に近いと「正の相関」（一方が大きくなると他方も大きくなる）があることを示し、T図（散布図）では基本的には右上がりの分布をします。 $-1$ に近いと「負の相関」（一方が大きくなると他方が小さくなる）があることを示し、T図では基本的には左上がりの分布をします。相関係数が0に近いときには、相関関係はない（無相関）ことを示し、T図は漠とした円を描くように分布します。

相関係数をどう解釈するか、には明確な基準はありませんが、一般的な目安としては、絶対値0.2未満では相関関係はない、0.2~0.4では弱い相関、0.4~0.7で中程度の相関、0.7以上で強い相関がある、と言われていきます。T図においても同様の解釈ができるかについては、今後検討していく必要があります。

なお、T 図に関する相関係数を解釈する際、相関係数は全体の傾向から外れた回答（外れ値）の影響を受けやすい、ということに注意する必要があります。T 図は散布図を抽象化したものであり、5 名未満は表示されません。そのため、外れ値が存在しても、T 図の見た目からはそれが確認できません。従って、外れ値が存在した場合には、T 図の見た目と相関係数の値が必ずしも一致しない、という事態が生じます。また、回答者が一部の層に偏っている場合に、相関係数は低くなる傾向があります。例えば、到達度が低い学生ばかりが回答しない場合には、到達度が高い学生のみでの回答で計算され、（履修者全体の場合よりも）相関係数が低くなりえます（選抜効果）。

他にも、他の変数が影響して、2 つの変数間の相関係数が見かけ以上に大きくなることがあったり、相関係数が 0 に近くても、直線的な比例関係を示していないだけで、規則性がないとは限らないことがあったりする点にも、同様の注意をお願いいたします。T 図や相関係数について、全学的な傾向を踏まえてさらに注意すべき点、検討すべき点が見られましたら、関係会議等で適宜ご報告いたします。

#### Q59 教員による成績評価と学生の自己評価の相関は高いほうがよいのでしょうか。

A 基本的には、少なくとも「総合到達度」は、成績評価に近いことが望ましいと考えられます。成績評価と学生の自己評価に大幅なずれがある場合、例えばシラバスの到達目標の内容について、学生と担当教員の間で理解が異なっている、教員の成績評価と学生の自己評価で評価基準が異なっている、学生の自己評価の能力がまだ不十分である、等の可能性があります。次年度の到達目標の文言を、より学生にとって分かりやすい、学生が適切な自己評価を行いやすいものに改変する、どのような基準に基づいてどのように自己評価を行えばよいのかを、授業の総括等で説明する、等、次学期以降での先生方のご協力をお願いいたします。

#### Q60 T 図の中には、「成績と総合到達度」など“総合到達度”という項目がありますが、これは何でしょうか。

A 「総合到達度」は、その科目の全ての到達目標に対して、それぞれの受講生ごとに到達度の平均をとったもので、FURIKA ではこれをその授業への総合的な到達度を示すものとして位置づけています。2017 年度までに行なった FURIKA の試行実施においては、それぞれの到達目標への到達度を問う設問とは別に、「総合的にこの授業の到達目標全体にどの程度到達しましたか」という設問を設けていましたが、この設問への学生の回答と、個々の到達目標への回答から算出した「総合到達度」には極めて高い相関が見られました（相関係数 0.8 程度）。以上の結果から、「総合到達度」がその科目に対する学生の全体的な到達度を示すものとして活用することに十分な根拠はあると考えています。

なお、「総合到達度」はその性格上、小数を含む値となります。FURIKA では、この値を四捨五入して整数化した T 図に配置しています（例えば総合到達度が「2.75」の学生は「3」のマス目に配置しています）。

#### Q61 科目のそれぞれの到達目標と成績の関係を示す T 図から、何を確認すればよいのでしょうか。

A 到達目標は通常、一つの授業に複数設定されているので、100 点満点の成績評価と必ずしも相関ができるとは限りませんし、また強く相関することが望ましいとも限りませんので、それぞれの到達目標と成績の関係を示す T 図はあくまで参照程度としてご活用下さい。具体的な活用方法としては、複数の到達目標のなかで著しく到達度の低いものや高いものがあるかどうか、あるいは、成績との相関について著しい違いが見られるものがあるかどうか、などを確認し、複数の到達目標の難易度のバランスをチェックする、等が考えられます。

#### Q62 「学習時間と到達度」の T 図では何を確認すればよいのでしょうか。また、この T 図をどのように活用すればよいのでしょうか。

A 「学習時間と到達度」の T 図では、学習時間の高低が、その授業での学生のパフォーマンスにどの程度影響を与えるのか、の概況を把握することができます。たとえば到達度が低かったと回答している学生の学習時間が多かったとしたら、授業の難易度が高すぎる可能性がありますし、彼らの学習時間が少なかったとしたら、学生たちを学習に「巻き込む」工夫が必要だということかもしれません（その場合、学生たちの「積極性」についての

回答も参考になるでしょう)。一方で、高い到達度に達している学生でも学習時間が少ない場合には、授業の課題の難易度が低すぎたり、課題が少なすぎたり、あるいは課題の指示が不明確であったりする可能性があります。特に学生たちの「積極性」の回答平均が高い場合には、必要とする予習復習の量を増やしたり、課題の指示を明確にしたりするなどして、より学生たちを学習させることができる余地があります。

なお、現時点ではほとんどの科目で学生の学習時間がかなり少ないようです。学生の学習時間の詳細については、教育開発支援機構の Web ページからダウンロードできる「授業アンケート速報値資料集」にてご確認ください。

**Q63 「出席と到達度」の T 図では何を確認すればよいのでしょうか。また、この T 図をどのように活用すればよいのでしょうか。**

A 「出席と到達度」の T 図では、その授業での学生のパフォーマンスが、出席率の高低にどの程度よっているのか、を確認することができます。特にパフォーマンスの低い学生について、それが出席率の低さによるものなのか、それともそれ以外の要素によるものなのか、を T 図をもとに識別しておくなどして、次学期以降の授業の難易度を設定する際にご活用下さい。

**Q64 「出席と到達度」の T 図が表示されません。なぜですか。**

A 出席率は、各教室（一部の実験・実習室を除く）に配置されている「出席調査用カードセンサー」および F U ポータル上の「教育・研究」のメニューである「出席管理」のシステム（出席調査用カードセンサーと連動）を基に算出しています。そのため、上記システム以外で出欠管理を行っている場合（先生ご自身が出席管理をされている場合など）においては、出席率を算出することができず、T 図を表示することができません。

ただし、次学期以降については、先生がご自身で上記システムに出席情報を入力されることで、「出席と到達度」の T 図を正しく表示させることも可能です。

**Q65 「GPA と到達度」の T 図は何のためにあるのでしょうか。**

A 「GPA と到達度」の T 図は、学生の基礎的な学習習慣や学力が、その授業での学生のパフォーマンスにどの程度影響を与えているのか、を確認していただくために設けています。科目によっては、特定の成績層の学生のパフォーマンスがどうだったかが重要になる場合があります。例えば初年時に配置する基礎ゼミのような科目では、学生たちにこれからの大学生活でしっかり学んでいくための学習の基礎を身につけてもらうことが主な狙いとなっています。ですからそれらの科目では、優秀な学生が高いパフォーマンスを発揮したかどうか、よりも、必ずしも基礎学力や学習習慣が十分に身につけていない学生たちが、しっかりと基礎を身につけられたかどうか、の方にウェイトが置かれると考えられます。このように、該当科目がターゲットとする成績層の学生が、実際に意図したように学んだかどうか、を確認する際にご活用下さい。

**Q66 回答の信頼性を判断する質問項目はあるのでしょうか。また、Web 調査では信頼性は低下するのではないのでしょうか。**

A 回答の信頼性を担保するためには、回答の信頼性を判断する項目を設定するほか、同一の測定内容である項目を多数合わせて尺度化することが行われます。しかし FURIKA は全ての授業科目で実施しますので、項目数を増やすと学生の負担が大きくなります。そのため、項目数を増やすことは現実的ではないと考えています。ただし、各授業における到達度を測定している項目に限っては、授業全体の到達度を複数の到達目標の到達度から測定していると考えられますので、到達度への回答全体は一定程度の信頼性があるということもできるでしょう。

また、FURIKA が Web での調査となることで生じる信頼性に対する影響（回答のバイアス）は、これまでの調査紙での調査と同程度であると想定しています。Web での調査結果は懐疑的に見られることがありますが、これは、モニター調査（モニター登録者を対象とする調査）と組み合わせられることが多いためだと考えられます。モニター調査においては、謝礼の獲得を主目的として調査参加することが多いため、郵送調査などと異なり、代

表性の問題（母集団と回収標本とのずれ）が生じることが分かっています。しかしながら、FURIKA はモニター調査ではありませんので、このような問題は生じません。

一方で、モニター調査でない場合においても、Web での調査には不良回答やいい加減な回答が生じえるなど、調査法としての課題があります。特に、回答時間の短さ、論理矛盾を含む回答、選択肢設問における規則的回答などが指摘されているところです。ただし、これらの測定誤差は、Web での調査に限らず、調査紙での調査においても同様に生じます。

このような測定誤差は、調査項目への回答の難しさ、回答者の動機づけなどに起因すると考えられます。FURIKA では、到達目標の設定の工夫、授業での総括の実施、フィードバックの学生自身の活用など、実施上の工夫を積み重ねていくことにより、今後より良い測定となっていくものと考えています。いずれにしても信頼性へ影響する回答のバイアスは様々に生じますので、実施結果に基づき今後も検討を続けてまいります。

**Q67 フィードバックされた情報では、教員側から見た学生への評価に比べて、学生自身による自己評価が高いように感じられます。こうした結果が出るのはなぜでしょうか。**

A 2018年度の結果からは、学生の自己評価は全体的に高めであるという傾向が見られますので、学生たちは実際よりも自分自身の到達度を高めに評価している可能性があります。ただし、2017年度のパイロット実施では、実際に自分自身がどれだけ到達しているのか自己評価しやすいよう具体的に記述された到達目標（特に「技能」）では、学生の自己評価と成績に高い相関があるケースが多く見られました。シラバスの到達目標をできるだけ具体的に記述にすることで、学生たちがより適切に自己評価ができるようになる可能性があります。

**Q68 学生の「学習時間」とは具体的にどのような作業をしている時間を指しますか。**

A FURIKA で言う「学習時間」とは、授業のための予習・復習や、課題を行う時間のように、机や本、パソコンなどに向かって作業をしている時間（直接的に成果につながる見込みの高い学習時間）はもちろん、授業に関連するテーマについてスマートフォン等で情報収集をしたり、授業に関連するテーマを話題として友だちと話したり、といった間接的、探索的な活動も含めた広い意味で捉えています。こうした活動は、直接的な学習に比べて、かならず学習成果につながるとは限りませんが、学習に幅と深みを与えるうえで重要であると考えられます。

**Q69 T図や棒グラフなど、フィードバック情報からどのようなことが読み取れ、また読み取った内容を授業改善にどのように活用できるのでしょうか。**

A T図を中心としたグラフの読み方、教育改善への活用方法については、今後の教育開発支援機構でも調査を進め、できるだけさまざまな媒体で情報提供をしていきたいと考えております。なお、2019年1月発行の「きこうだより」第13号で、具体的な授業をモデルに、フィードバック情報の読み方や、改善の方向性についてご紹介しております。「きこうだより」は教育開発支援機構ウェブサイト (<http://www.idshe.fukuoka-u.ac.jp/>) に掲載しておりますので、ぜひご一読下さい。

**Q70 FURIKAの結果に基づいて授業の改善を行っても、改善結果を反映できるのは翌年になってしまうのではないのでしょうか。**

A FURIKA は「学生がその授業で何を学んだか」という観点を中心としたアンケートであり、実施および結果の公表は学期終了後になります。しかし、FURIKA とは別に、先生ご自身が FU ポータルに掲載のアンケート機能などを活用して授業期間中にすぐに改善ができる項目（声の聞き取りやすさ、授業の難易度やスピード、課題の量など）について個別にアンケートを実施することは可能です。なお、教育開発支援機構では、先生方ご自身が行うアンケートのひな形を準備中です。完成次第、別途お知らせいたします。

**Q71 出席率の低い学生の回答は信頼性が低いと考えられます。出席率が一定以下の学生の回答をカットしたデータも提供してもらえないのでしょうか。**

A そうした要望は複数寄せられていますので、今後の検討課題とさせていただきます。なお、FURIKA のフィードバッ

ク情報には、出席と到達度のT図が含まれていますので、学生の出席率に応じた到達度の分布については確認することが可能です。

**Q72 表示されるグラフが多いため、内容を読み取るのに努力を要すると感じます。もう少しグラフを整理し、表示数を減らすことはできないでしょうか。**

A 教育開発支援機構では、どのようなデータがどのような教育改善に活用可能なのか、今後の調査を続けていく予定です。調査を通じて、より教育改善において活用可能性の高いものを中心に再編成するなど、フィードバック情報をより見やすいものにしてまいります。

**Q73 学位（教育）プログラム全体のフィードバック情報をプログラム全体で共有することはできないのでしょうか。**

A 学位（教育）プログラム全体のフィードバック情報は、学位（教育）プログラムごとに定められた責任者（プログラム責任者）の方に公開しています。プログラム全体のフィードバック情報をプログラム全体で共有するかどうかは、プログラム単位でお決めいただくこととなっておりますので、ご所属のプログラム責任者に確認して下さい。

NEW

**Q74 FURIKAの結果は、FURIKAによる学生の回答はあくまで自己評価に過ぎないのですから、学習成果に関する信頼できるエビデンスとして捉えることは難しいのではないのでしょうか。**

A 学生の自己評価は、そのまま学生の学習成果を正確にあらわすものではありません。成績との相関や出席状況など、その他の情報と関連付けながら、学生がどの程度正確に自己評価を行っているか、を把握する必要があります。FURIKAの分析結果を学習成果に関するエビデンスとして活用される場合には、まずは学生の自己評価がどの程度学生の学習成果を反映しているか、をご確認ください。なお、成績と自己評価の相関や出席状況など、学生の自己評価の適切性を確認するために必要な項目は、いずれもFURIKAのフィードバック情報からご確認できるようになっています。

NEW

**Q75 FURIKAのフィードバック情報の「読み方」は、教員だけでなく学生も学ぶ必要があるのではないのでしょうか。**

A ご指摘のとおりです。修学指導や初年次ゼミの場などで、学生にレクチャーしてはどうか、というご意見もいただいております。本来なら大学として全学的に情報提供の場を設けた方がよいと考えられますが、現実としては本学には全学必修・全学共通の初年次ゼミ等が存在しないため、現時点では学生への情報提供は各学部にお問い合わせすることになります。ご協力、どうぞよろしくお願いいたします。

なお、各学部における学生への情報提供を支援させていただくため、機構としては就学指導や基礎ゼミなどの場でご活用いただけるようなコンテンツを用意しております。ひとつはFURIKAの学生向けマニュアル（FUポータル「FURIKA」メニューから確認できます）、もうひとつは『福大生のための学習ナビ 2019』（pp. 17-21「授業アンケート FURIKAの活用」）です。ご活用のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

## 2. 公開範囲について

**Q76 複数の教員が担当する科目において、科目代表者のみがアンケートの結果を見ることが出来るという点は改善していただけないのでしょうか。**

A 教務システムの仕様により、科目代表者として登録されている1名のみしか当該科目にアクセスできません。ご不便をおかけして恐縮ですが、PDFダウンロード機能をご活用いただき、ぜひすべての担当教員の先生方で情報を共有して下さいますようお願いいたします。

## 第5章 学生へのフィードバック情報について

### 1. 公開範囲・時期について

**Q77 自分が履修していない授業科目の回答結果についても、今後の授業選択のために、見る事ができるようにした方がよいのではないのでしょうか。**

A 全ての授業科目のアンケート結果を、全ての学生が見られるようにする、ということは現時点では考えておりませんが、学生の履修選択のための重要な情報源として一部の情報を部分的に開示することは、既に「新授業アンケート実施要綱」で了承されています（平成28年11月10日開催の教育推進会議で報告）。今後、具体的にどういった情報を、どのように開示していくか、についてしかるべき会議体で全学的に検討を進めていく予定です。

**Q78 4年次生の後期および通年科目においては、結果の公開が卒業直前となってしまうので、FURIKAに回答することは学生にとっては無意味なのではないのでしょうか。**

A 学生へのフィードバックは、学習成果の振り返りに活用してもらうことを期待して行っています。4年次生（6年次生）はフィードバック情報を次学期に活かすことはできませんが、4年間（6年間）の学習を通じた自分の強みや課題、学習の傾向を把握することは、卒業後にも役立つものと考えています。

### 2. 学生への対応について

NEW

**Q79 2018年度の「DP対応問題」はどうなりましたか。**

A 「DP対応問題」は、具体的には次のようなものでした。

まず、それぞれの科目の到達目標は学位（教育）プログラムのDPに関連付けられています。FURIKAでは、到達目標への到達度は、そのDPへの貢献度としてカウントされ、学生たちは自分が学んでいる学位（教育）プログラムについて、どのDPについてどのくらい学んだのか、の累積が確認できるようになっています。

ところで、科目の中には複数の学位（教育）プログラム向けに開講されているもの（以下、「学科横断科目」とします）があり、そうした科目の到達目標は、本来であれば複数の学位（教育）プログラムのDPに対応づけられていなければなりません（到達目標と学位（教育）プログラムのDPは一对多でなければならない）。

しかしながら、2018年度までのシラバスシステムの仕様では、各科目の到達目標は、ひとつの学位（教育）プログラムのDPにしか対応づけられていませんでした（上記対応は一对一对応）。そのため、学科横断科目については、DPへの貢献度を適切にカウントすることができていませんでした。よって、特定の学位（教育）プログラムの学生たちについては、FURIKAのフィードバック画面において、自分がこれまで履修した授業科目が累積としてDPへの到達にどれくらい貢献しているか、を正確に知ることができなくなっていました。

以上の問題を解決するため、シラバスシステムの改修を行い、2019年度からは、学科横断科目の到達目標を複数の学位（教育）プログラムのDPに対応づけることができるようになりました。その結果、一部の科目を除き、現在ではDP対応問題は生じておりません。シラバス作成等、先生方のご協力にこの場をお借りして御礼申し上げます。

**Q80 成績と自己評価にずれが生じていた場合、成績について納得できない学生の対応はどのようにすればよいのでしょうか。**

A 短期的な対応と長期的な対応の二点が可能であると考えています。

まず短期的な対応ですが、成績評価に対する自己診断や見込みがずれていなかったかどうかの確認を促したり、FURIKAのフィードバック情報をよく確認して、実際の成績評価と自己診断のずれが他の科目でも同様にみられ

るかどうか、振り返りを促したりするなどして、成績評価に対する自己診断のずれの要因を把握させる、などが現時点で考えられます。そのうえで、その学生が他の授業科目ではほぼ適切に自己評価ができているのに、ある授業科目だけ大きくずれている、などのような場合には、学生に「成績問い合わせ制度」を活用してもらうことを促すのもよいでしょう。

続いて長期的な対応ですが、FURIKAのフィードバック情報を用いて、学生による自己評価と教員による成績評価のずれがどういった層の学生において、あるいはどの到達目標において生じやすくなっているか、を把握されることが重要であると考えています。これらの把握を踏まえて、先生が次学期以降に同じ授業を担当される場合、授業の総括において到達目標への自己評価の仕方を丁寧にご説明されることで、学生の自己評価の精度をあげるような補助を行ったり、あるいはできるだけ学生の自己評価との間に乖離が生じないよう、成績評価の方法や配分を変えたりするなどして、次学期以降の授業においてずれが少なくなるよう試みることは可能であると考えています。

**Q 8 1 授業時間内で FURIKA を実施しようとしたのですが、すでに回答してしまっている学生がいます。どうしたらいいでしょうか。**

**A** 学生から回答をやり直したい旨の申し出があった場合は、教育開発支援機構事務課（A棟地下1階）に問い合わせるよう指示してください。なお、授業の総括を聞いたうえでより適切な回答を促すため、授業内で先生が授業の総括を行う場合には、ぜひ FURIKA の実施期間になる前に、学生たちに事前にその旨を案内して下さい。

**Q 8 2 学生向けのフィードバック情報を見ていない学生がいるようです。もっと多くの学生たちに見てもらうことはできないでしょうか。**

**A** 今後、教育開発支援機構では、学内掲示や FU ポータル等を通じて、FURIKA のフィードバック情報についてできるかぎり情宣してまいります。加えて、先生方もぜひ授業で FURIKA 実施する際などにフィードバック情報の閲覧を勧めるなど、ご協力をいただければ幸いです。